視覚におけるフレームの役割について

大阪芸術大学　美術学科　教授　日下部　一司

一般的に「額縁」は絵画や写真などの持つイメージを効果的に提示するための仕掛けである。

しかしヨーロッパでの古い教会の祭壇画は壁面に取り付けられた「枠」の中に描かれていた。つまり建築の一部として描かれ、絵画として独立した存在ではなかったのである。

後に、このような枠の中に入った絵画も壁面の宗教的な装飾から離れ別々に分離・制作されることとなる。徐々に絵に似合った様々な額縁デザインが考案されていくようになるのである。

日本における額縁の歴史を辿ると、奈良時代に中国から伝わった「扁額」と呼ばれる建物の室内外や門・鳥居など概ね高い位置に掲げられる木製の看板状ものが起源である。これは絵画を展示するためのものではなくいわば表札や木札のような文字を装飾する役目を持っていた。

今日のような紙に書かれた文字や絵を保護し、表装としての役割を持つものは江戸時代に始まったようだ。その後、明治時代に鎖国が解かれ西洋文化が流入してくると、生活様式も変化し、それに伴い掛け軸などの表装に代わり西洋額が好まれるようになっていく。文化様式の推移の中で、「額縁」は生活空間の中へと形を変えながら居場所を得ることになるのである。

このような額縁の概念は日常生活の中で変化し、様々なシーンで自然に受け入れられ、無意識のうちに活かされている。たとえば窓の向こうに見える風景は、窓という額縁に切り取られた情報である。画用紙に描かれた風景画も、画用紙の四角い額縁に納まる風景なのである。このような場合の「額縁」は「フレーム（frame）」と表現したほうが適切かもしれない。

私はこれまで絵画・写真における「矩形」について、またカメラのファインダーにおけるアスペクト比と写真、ネガキャリアを削ることで表明できる「ノートリミング」、円形で対象を捉える写真の造形性などについて作品制作を中心に研究を進めてきた。これらはどれもが、「フレーム」に関わる考察でもあった。

フレームという言葉の示す内容を整理してみると「物の周囲を囲むもの」と定義されることが多い。枠・縁・額縁など、外部と内部を仕切る物理的な存在である。

ほかに、内容や機能を支える概念的・物理的なとらえ方として、映画などでは撮影される範囲の枠取り、あるいは様々なショットにおける基本的な単位のことを指す。自転車などの車体を構成する基本構造をフレームと呼ぶこともある。建造物・機械・道具などの骨組みを表すこともあり、様々な使われ方をする。また、「組み立てる」「枠にはめる」といった意味を持つ動詞として用いられることもあり、そこから派生して「文書を作る」「計画を立てる」という使われ方もされる。つまり、視覚や機能を整理する構造的な要素としてフレームは定義されているのである。

本研究の基本的な考え方は、「フレーム」がイメージを包む容器である、と広義に解釈することである。また、フレームが作品内容にまで干渉する力を有すると仮定する点が特色でもある。そのため、物理的な額装のみならず、版画・写真領域でのグラフィックイメージをフレームという概念に結びつけることで総合的に操作し制作することになる。

以前からフィルム撮影においてノートリミングでの撮影を心がけている。従って、プリント時にはネガキャリアをヤスリで削り、フィルムに写っている写真イメージをトリミング無しに表示する方法を採ってきた。このため写真の周囲が黒い線で囲われる画像になるが、この黒い縁は一種のフレーム的な効果を果たしている。こうした写真を額装すると、二重にフレーミングすることになり、更にマットを切って額装すると三重のフレーミングを行うことになる。このような制度としてのフレームについて様々な角度から考察できた。

葛飾北斎の版画「蔆穴の不二」における矩形とイメージへの病的なこだわり、ジョルジュ・スーラの絵の中のフレーム、アルベルト・ジャコメッティの絵画におけるキャンバスの縁をなぞるような線、アンリ・カルティエ＝ブレッソンの厳格な構図と対へのこだわり、古い例では、1490 -1500年頃と思われる聖母子像に見られる一部額縁にはみ出して描かれた絵画など、「枠」を意識し制作された作品など、興味深い事例に出会いながら自分の制作を考えることができた。なかでも、1033年に制作されたというジョゼフ・マロード・ウィリアム・ターナーの「ヴェネツィアを描くカナレット」のなかに描かれた、額縁に入ったキャンバスをイーゼルに立てて描いているカナレット（ジョヴァンニ・アントーニオ・カナール）が気になっている。通常、額縁に入った状態で描くということは考えられないので、フレームに対するこの特殊な関わりが興味深い。ターナーとカナレットは生きた時代も違うので、実際にこの風景を見て描いたのではない。額縁に入ったキャンバスに向かって風景を描写するという、ターナーの構想にはどのような意図があるのだろうか。

作品発表として、美濃加茂市民ミュージアム（岐阜）での個展「風景を愛でる」で、このテーマに基づく106点の写真作品の発表をすることができた。また昨年度に引き続き、折り畳み式の印刷物を制作した。61枚の写真作品を三つ折りの紙面に配して構成したものである。展示と印刷物により、立体的に時間・空間を取り込む容器としての「フレーム」を考えることができた。引き続きこのテーマでの研究を進めたい。